



第21回

「近未来」を見る匠



長島哲也は、ITアーキテクトである。さまざまなソフトウェア、ハードウェア、テクノロジーの中から、お客様が「今」必要としているものを的確に選択し、「これから」求められるものを確実に見極める。その手腕は確かな経験に裏付けられ、正確極まりない。そして、その視線は、常にお客様の近未来に向けられている。今回の「匠」には、IBMからお客様へのテクノロジーのガイドラインを提示していきたいと語る、長島に登場してもらった。

アーキテクトということですが。

私がアーキテクトに認定されたのは1993年ですが、当時はITアーキテクトという呼び名ではなく、システムズ・アーキテクトという名称でした。その後1995年に、システムズ・アーキテクトをその専門性に応じてITアーキテクトとITスペシャリストに分化する方針が示され、私はITアーキテクトを選択しました。それ以来、現職のITアーキテクトを継続しています。

現在はITアーキテクトとして、社内向けには、国内のアーキテクト・コミュニティ醸成のためにリーダー的活動をしています。例えば、Tec-J (Technical Expert Council-Japan) やCRB (Certification Review Board) などの活動です。Tec-JはIBM認定プロフェッションが中心となり、現在、近未来のホットな技術について議論を戦わせているコミュニティのことで、また、CRBはIBM技術者の認定評価を行う仕組みです。

外向きの仕事では、二つの大きなミッションを持っています。一つは日本初・世界初の仕事をうまくサービス・インさせるために、実際のプロジェクトにアーキテクトとして参画して道筋を間違えないようにするという仕事です。もう一つは、IBMのテクノロジーとか製品、特にソフトウェア製品をお使いではないお客様に対して、講演などを通じて、IBMのソフトウェア製品を知っていただき、ご利用いただけるようにする仕事です。

アーキテクトの仕事を進めるために重要なことは。

スペシャリストとは、ある特化した分野に秀でた人たちのことですが、アーキテクトは、テクノロジーや製品、環境を見て、それが運用可能なのか、機能の面でも達成で

きているのか、ビジネスの観点で問題なのか、この三つの軸のバランスを取ってアーキテクチャーを決めていく仕事です。

そこで間違いのない選択をするためには、お客様の一步先の未来、いわば「近未来」を見る必要があります。お客様の現状を見据えるのは基本です。現状を改善するだけでは、そこで終わってしまいます。その先に何かがあるのか。アーキテクトは「近未来」を見た上で、問題のないものを選択しているのかを見極める必要があるのです。

「見極め」を間違わないようにするためには。

私の場合は、たまたま昔から最先端を走るプロジェクトにかかわってきましたので、社内に存在する情報だけでは仕事遂行には不十分でした。従って社外の情報収集に努力してきました。人から一步抜き出すためには、ほかの人と同じことをやっているとは駄目だと思います。特にアーキテクトには幅広い知識が必要とされますので、情報を貪欲に吸収することを心掛けています。例えば、今はいろいろな雑誌がありますが、それを全部読むのは現実的には難しい。そこで、仕事にフィットしたものを見つけ出しています。それを見つけるための勘みたいなものが重要な気がします。

定着させていきたい仕事上の方法論などは。

日本人はメソッドロジカルに仕事を進めていくこと不得意です。しかし、海外ではほとんどそういうやり方です。まず、作るものを決めてから作り始めるのです。こういったメソッドロジカルな進め方をサイクリックに回していくと、過去のケースを参照することができます。どうすればうまくいくのか、最初に分かるわけです。実践を通じて、

こういった仕事のやり方を定着させていきたいと思っています。

ところで、日本アイ・ピー・エムに入社した理由は、

私が入社したのは1978年です。その時期に、これからはコンピューターが欠かせない世の中になっていくのではと思ったことが第一の理由です。それから日本アイ・ピー・エムという会社は、学歴とか出身校などと関係なく、「仕事の内容で評価してくれそうな会社」という印象がありました。実際に入社してみると想像した通りでした。押し付けで仕事をやらせるのではなく、自発的に仕事することに価値を見いだしてくれる会社でした。

入社後は、どのような仕事を担当しましたか。

入社後しばらくは、システム・センターという部門でトレーニーとして4月から12月までお世話になりました。その後、製造業の担当営業所に配属になり、コンピューター周りの「お守り」やハードウェアの導入、オペレーティング・システム(OS)に近いところを中心に仕事をしていました。それから、お客様がお使いになるアプリケーション・システムをつくる仕事に従事しました。私の場合は担当が製造業でしたので、CADや技術計算、生産管理システムなどの構築に携わりました。

深く印象に残っている仕事は、

入社6年目に東京を離れ、広島に2年、神戸で8年間ほど地方勤務の経験をしました。特に印象に残っている仕事は、神戸時代に担当した三菱重工業様で経験させていただいた原子力プラントの統合システム・プロジェクトです。このプロジェクトの目的は、原子力プラントを構成している全データを統括的に管理する統合データ

ベースの開発、原子力プラント自身を3次元CADで設計するシステムの開発、エンジニア同士のコミュニケーションを円滑にするための電子メール・システム実現の三つでした。特に、3次元CADによる設計では、原子力プラント内に交錯している配管の干渉状況が容易にチェックできるようになりました。それより以前は、干渉状況確認のためにプラスチック・モデルを作成し、目でチェックしていました。また、保守エリアが確保されているかを確認するために、10cmくらいの人形を使ってプラスチック・モデル内に保守エリアが確保されているかシミュレーションしていたんです。今では、PCやゲームの世界でも3次元CGは普及していますが、1985年くらいの話ですからね。エンジニアリング・ワークステーションが出始めのころで、非常に高価なシステムでした。

また、電子メール・システム実現に当たっては、メールそのものの機能よりも、当時主流であったPC-DOSの上に、全設計者に満足してもらえる稼働環境を構築することが大変な仕事でした。このプロジェクトも1986～89年の話ですので、まだ、PCの能力は低かったですし、シングル・タスクのPC-DOSという制約を踏まえて解決すべき課題は山積みでした。最終的に、PC-DOSベースでアイコンやマウスでいろいろナビゲーションができるシステムをつくり、全設計者に利用してもらえるまでに成長し、成功を収めました。

お客様とのかかわり方は、

今までに経験したどのプロジェクトでも、お客様もアイ・ピー・エムもプロジェクトを成功させるといった目的を共有できていたものばかりでしたので、一体感がありました。また、お客様の会社に直接入社する

形態でのプロジェクト遂行も一体感を持って仕事できた理由がも知れません。

ただ、お客様の信頼を得るためには、お客様の「近未来」がどうなるのかを常に考えて、発言や行動することが重要です。それを訴えかけて仕事をする。そんな気構えを持つことが重要だと思います。

それはアーキテクトを目指す若い世代にも伝えたいことですね。

現状に満足しないで、あらゆることにチャレンジしてほしい。仕事の面でもパーソナルな面でもです。それが積み重なって、個人のスキルの質と量になると思います。

最後にこれからの抱負などを。

私はアーキテクトとして、システムづくりに当たって間違いのない選択をしていけるようなガイドをつくり、話をしていくことで、IBMに貢献していきたいですね。お客様が間違いなく製品やソフトウェアを選択できるような指標を提示させていただきたいと思います。それがわれわれのようなシニアなアーキテクトの仕事だと思っています。

長島 哲也(ながしま・てつや)

日本アイ・ピー・エム株式会社
テクニカル・サポート
システム&ウェブソリューション・センター
シニア コンサルティングITアーキテクト

[プロフィール]

1978年日本アイ・ピー・エム入社。製造業のお客様担当SEとして三菱重工業様などを担当。CADや技術計算などのプロジェクトに携わる。その後、日本初のロータス ノーツ・プロジェクトやオブジェクト指向プロジェクトをサービス・インさせる。現在、シニアコンサルティングITアーキテクトとして、お客様のe-ビジネス・システム実現に向けて活躍している。